『新ライン新聞』と東ヨーロッパ諸民族の独立について

久場嬉子

『新ライン新聞』(一八四八年〜一八四九年)においてマルクスとエンゲルスは、ドイツ三月革命の徹底的遂行を目的とした数多くの政治的諸論文を発表した。この時期のヨーロッパでは、ドイツのみならず殆んどの部分が革命的諸運動に捲き込まれていたが、それらはその社会的・政治的危機の様相において次のように大別されるものであった。即ち、一つはイギリスのチャーチズム、フランスの二月革命において明らかな、プロレタリアートとブルジョアジーの対立を危機の根本的原因とする西ヨーロッパのそれである。いま一つは、まだ達成されていない民族の独立と統一のための、内外の封建的絶対主義勢力に対する闘いを根幹とする東ヨーロッパの革命的諸運動である。ドイツ、ポーランド、ハンガリア等が後者に含まれる(イタリアもこの範疇に入る)。もとよりマルクスとエンゲルスは、これらの西と東の諸運動が互いに密接に結びつき、全ヨーロッパ的な危機状態を生み出していると考えていた。このような国際状勢の中にあって、『新ライン新聞』が主な対象としたものは、ドイツ革命であり、それと必然的に結びついていると考えられる他の東ヨーロッパ諸民族の独立闘争であった。本稿では、マルクスとエンゲルスが、ブルジョア民主主義革命という歴史的段階において、民族の独立・統一の問題と革命の問題をどのような関係で考察したか、さらにまた、その思想形成の初期段階にある彼等が、民族の問題についてどのような基本的認識を持っていたか、そのいくつかの点を明らかにしたい。

周知のようにポーランドでは、既に一八三〇年にロシアからの、一八四六年にはオーストリアからの独立を要求する運動が起きていたのであるが、一八四八年に至りポーゼンでプロイセンによる「再組織」をめぐって反乱が生じた。(イタリアでも同様に、一八三〇年来の独立闘争を受けて、一八四八年にはオーストリアとの間で戦争が始まった。)オーストリアでは、ハンガリア(マジャール人)及びその他の諸スラヴ民族が、オーストリアからの独立を要求し、一八四八年にハンガリアは、仮政府を組織し民主的な議会の設立を宣言するに至った。ところでドイツは、自ら他民族の併合・支配を行いつつ、同時に自国の統一と独立の課題を負っていた。即ち、絶対主義的君主連合たる神聖同盟の一翼を担って、ポーランドを分割し、ハンガリアに兵を向けるプロイセン、オーストリアは、「ヨーロッパ反動の偉大なる背骨―ロシア」[1]に対するドイツの従属を示すものにほかならず、「全ヨーロッパの専制の傭兵」[2]というもっともみじめな役割を果しているのである。従ってマルクス、エンゲルスにあっては、このようなプロイセン、オーストリアを解消

し、新しいドイツを建設すること、そのためにはまず何よりも、神聖同盟という仇敵に対して、東ヨーロッパの革命的諸民族が団結することこそ必要だと考えられたのである。エンゲルスはこのような事情を次のように述べている。「ハンガリアを独立させ、ポーランドを再興し、ドイツ系オーストリアをドイツの革命の焦点とし、ロンバルディアとイタリアを当然に独立させること、――こうした諸計画を遂行することによって、東ヨーロッパの諸国家の全体系は破壊され、オーストリアは消滅し、プロイセンは解体し、ロシアはアジアの境界に撃退されるのである。(3)」

さて、新しいドイツの建設――ドイツ革命の徹底的遂行にとって、最も重要な問題を提起したのはポーゼンの反乱であった。この反乱は、はしなくもドイツ革命の質そのものを問い、東ヨーロッパ諸民族の独立闘争における根本的問題点を浮彫りにすることとなった。まず、ポーゼンの反乱はその根本的原因を、前世紀末以来のドイツの絶対主義的体制による対外政策に負っている。フリードリヒ二世がドイツ人をポーゼンに植民させて以来、ポーランドのゲルマン化が始まり、プロイセン政府の資金を得てドイツ人農民はポーランド人農民より大きな土地を手に入れるのであるが、一方世襲領主となったプロイセン王は、ポーランドの王領地と教会領地を没収し、これを「王家の〝光輝と威力〟を伸長するため、また王家に献身的な光輝あり・威力ある田舎ユンカー層を作り出すために……いわゆる〝功労者〟に下賜(4)」したのである。こうして「ポーランド人のうえに〝ドイツ人の権益〟と〝圧倒的なドイツ人の土地所有〟とが接木された。(5)」ところで自らの土地を奪われたポーランド農民は、プロイセンと同時に自国の封建的大貴族とも対立しなければならなかった。彼ら大貴族は自らの権益を守るために、分割者と同盟したからである。マルクス、エンゲルスによれば、このような事情こそ、ポーランドにおける民族独立闘争の社会的基盤を為すものにほかならなかった。ポーランド人は、「まったく当然なことであるが、ポーランドの抑圧者たちと自国内の大貴族との両者に対抗する……（小）貴族(6)、都市市民、そしていくぶんは農民の同盟があらわれ……彼らの対外的独立が、国内での大貴族の打倒及び土地改革と切っても切れないように結びついていることを、どんなによく理解(7)」し得たことか、とエンゲルスは述べている。故にポーランドの独立のための闘争は、「家父長制的＝封建的絶対主義に対する農業民主主義……の闘争でもある(8)。」かくしてマルクスとエンゲルスは、ポーゼンの反乱の分析から、東ヨーロッパの民族独立について、次のような基本的視点を導いたのである。まず第一は、民族の独立は、自国の社会変革＝被抑圧階級の闘争と結びつかなければならないこと、第二は、封建的農業国においては土地革命こそ最も急務であること、第三は、プロイセン（ドイツ）とポーランドの革命的勢力は、その敵を共通にしている以上、必然的に革命の同盟を結ばなければならないこと、以上である。既に明らかなように、「民主的ポーランドの建設は、民主的ドイツの建設のための第一の条件(9)」を為している。ただ「プロイセン国家の国庫を

みたすため」[10]ポーランドにおけるプロイセンの既得権益を守ろうとするところのポーゼンの編入は、新しい領土略奪にほかならない。従って、革命によって成立したフランクフルトのブルジョア国民議会が、この編入を承認したことほど、三月革命そのものの性格を如実に示したものはなかった。ドイツのブルジョアジーは、プロイセン絶対主義の旧来の政策を支持し、プロイセン「王家に献身的な……田舎ユンカー層」の利害と妥協したのである。このようなドイツ・ブルジョアジーの妥協的性格は、自国の土地革命に対する不徹底な姿勢に、最もよく示されたのであった。彼らは、「マルクやポンメルンやシューレージェンの田舎ユンカーを出来るだけ保護させ、農民たちからは出来るだけ多くの革命的成果をだましとらせてやるため」[11]に、僅かの封建的負担に対してのみ有償の銷却を決め、このような欺瞞的な「銷却の形式での封建的諸権利の存続とその是認」[12]を行ったのである。ブルジョアジーによるポーゼン編入の承認、オーストリアによるハンガリア独立闘争の鎮圧、これらはすべてドイツが「種族戦争(Stammkrieg)で自分の新時代に泥を塗った」[13]ことを示すものにほかならない。

以上によって我々は、三月革命の対外政策を分析するマルクス、エンゲルスの視点が、ドイツは「外国を解放することによって国内をも解放する」[14]ことが出来るという認識に立っていたこと、結局東ヨーロッパの独立闘争におけるドイツ・ブルジョアジーの裏切りは、彼らがドイツの民族独立と統一を、自国における徹底的な社会変革=被抑圧階級(農民)の解放と結びつけ得なかったという点に根本的に帰因していると考えたことを識った。ドイツ・ブルジョアジーの対外政策は、依然としてヨーロッパ反動の盟主・ロシアへの従属であり、また彼らのドイツ統一への志向はプロイセン主導下のそれであった。民族の独立と統一を、国内における社会変革=被抑圧階級の解放と結びつけること、これがマルクス、エンゲルスの最も基本的な視点の一つである。さて、ハンガリアにおける独立闘争も、その基本的意義においてはポーランドのそれと同一であったが、マジャール人の運動はそれにつけ加えてもう一つの新しい問題を提示している。オーストリアからの独立を要求する闘争の過程で、元来オーストリアに定住していた一ダースにも及ぶスラヴ諸民族(南スラヴ人)と、マジャール人、ドイツ系オーストリア人との間に、鋭い対立が生じ、マルクスとエンゲルスは力をこめて、マジャール人の独立闘争を支持することとなった。その際彼等が第一に重視したことは、マジャール人の独立闘争こそ、ロシア=オーストリアの絶対主義的勢力と闘うものであり、その闘争を土地改革=封建的農民の解放と結びつけたことであった。これに対し南スラヴ人の目的は、「分散したスラヴ民族に、一方ではロシアというかたちで、他方では……ロシアに依存しているオーストリア連合君主国というかたちで、拠点を与えることを目的とする」[15]ものである。ではこのような相違は、何に帰因するのであろうか。エンゲルスによれば、ポーランド人、ロシア人、せいぜいトルコのスラヴ人を除いては、「独立と生存能力(Lebensfähigkeit)とのために必要な第一の歴史的、

地理的、政治的、産業的条件を欠いている」[16]のであり、彼等はまた、「一千年もの久しきにわたって圧制を受け民族性を奪われてしまった（Entnationalisierung）」[17]のであり、「相互に分離した、無力な、民族の力（Nationalkraft）を奪われてしまったまさにそうした群小種族」[18]なのである。従って彼等は、「民族性（Nationalität）、つまり空想的な、一般スラヴ的な民族性」[19]かあるいはロシアの鞭以外、民族の紐帯を持たないのである。汎スラヴ主義 Panslavism のイデオローグ、バクーニンは、「文句なしの〝自由〟を絶対的に要求する、いわゆる民族の意志（Volkswille）」[20]を主張するものとして、批判されたのである。我々はここで、次のような点を確認することが出来るであろう。即ち、既に述べたように、民族の独立を可能にする諸条件を喪失してしまった「民族の断片」は、その独立を求めようとすれば反動の餌食になるほかないが、、このことはまた逆に、民族独立の歴史的役割を確認することでもあったという点である。つまり一定の歴史と領土を持ち、政治的中央集権化を行い、市民階級を形成して商・工業の発展をとげ得る諸民族はすべて、その独立を達成し、そしてその内的発展を通してのみ、人類の普遍的解放に寄与することが出来るのである。「必要なことは、名目だけのポーランドを建設することではなく、生命力のある基礎の上に一つの国家を建設することである。」[21]ドイツとても同様である。もちろん新しいドイツ＝ドイツ民族の統一は、家父長制的＝封建的絶対主義に対する徹底的な闘いを通じてのみ形成されるべきものである。「我々は、ドイツの統一を望んでいる。しかしこの統一の諸要素は、ドイツの大君主国をうちくだいた破片の中からのみ現われてくることができる。この諸要素は、戦争と革命の嵐でのみ、これを一つに融合させることができる。」[22]マルクスは言う、「プロイセンのブルジョアジーは、国民（Nation）としては存在しないで、ただ州、都市、地区、私人としてだけ存在している。」[23]旧来のドイツ連邦議会を廃止し、人民主権に基づいた・正真正銘のドイツ民族国家形成が、『新ライン新聞』の重要な綱領の一つであった。そしてマルクスとエンゲルスにとって、このことがまさにプロレタリアートの利害を表明するものなのである。後年エンゲルスは、回顧して次のように述べている。「ドイツの一民族国家（Nation）への最後的統一……その民族国家だけがすべての伝統的な……障害物をもはらいきよめ、プロレタリアートとブルジョアジーが彼等の力をくらべるべき戦場を用意しうる。」[24]

東ヨーロッパ諸民族において民族の独立は、反封建的ブルジョア民主主義革命の遂行と結びついていること、さらにまたこのような過程を経て生まれる近代民族国家は、各々の民族が内的発展を遂げるための前提となること、そして、まだ民族の統一・独立を達成していない諸民族の解放は、民族間における平等で対等な関係を形成する先ず最初の土台となるものであった。以上がマルクス、エンゲルスにおける基本的認識であった。民族独立の歴史的必然性をみることなく、現状のままで「正義」、「自由」、「平等」、「友愛」、「独立」を唱えることは、思弁的代

弁者が空文句を唱えることか、あるいはまた、反動に身をかすことにほかならない。ポーランドの併合をもって、必然によって予定されたその行路とし、ポーランドの没落に対する至当な悲しみを、愚かな感傷と呼んだところのドイツ民主主義者を、エンゲルスは、世界主義的博愛主義者と呼んだ。同様にまた、スラヴ諸民族間に存在する様々の社会発展段階上の相違をも顧慮せず、民族性をもってのみ、その紐帯としようとしたバクーニンも、「全般的解放」に対して現実の作り出す障害を無視する、その観念性によって批判されなければならなかった。「諸民族の全面的な親睦」とか、「世界の恒久平和」の問題については、エンゲルス自ら「当時最良の友」と呼んだところのイギリス及びフランスの民主主義者でさえも、その真の意味を理解することが出来なかった。彼等もまた、「個々の民族の歴史的地位や、その社会的発展段階を考えずに融和させたがる民族の全面的親睦(25)」という思想にとらわれているのである。各々の民族は、先ずその民族的独立を勝ちとること、それによって初めて、即ちその内的発展を通して初めて、普遍的なヨーロッパの解放に参加し得る。そのためには、「根本的な革命と血みどろの闘争」が要求されるのである。当面する諸民族間の同盟は、「すべての民族が、一つの共和国の旗の下に親睦を結ぶことではなくて、革命的諸民族が、反革命的諸民族に対抗して同盟を、……戦場ではじめて成立する同盟を結ぶこと(26)」、これが階級及び民族の対立・抗争するヨーロッパにおける唯一つの可能な同盟なのである。たしかにあらゆる民族のブルジョア階級の内には、一種の友愛が存在する。しかしそれは、被圧迫者に対する圧迫者の友愛、被搾取者に対する搾取者の友愛にほかならない。こうしてマルクスは、次のように結論づけている。「諸国民が真に団結し得るためには、彼等の利害が共通でなければならない。彼等の利害が共通であり得るためには、現在の所有関係が廃止されねばならない。そのわけは、現在の所有関係は諸国民相互間の搾取を必然的に結果するものだからである。……プロレタリアートの勝利は、同時に今日、諸国民を相互に敵視対立させている国民的・産業的紛争に対する勝利である。(27)」

既にのべたように、東ヨーロッパ諸民族の独立闘争を分析するマルクス及びエンゲルスの立場は、先ず何よりも社会革命の遂行との結合ということに置かれていた。もとより全ヨーロッパ的視点からみれば、ヨーロッパの変革はそれ自身の発展を遂げ、「その時が来れば、大陸に革命を命じる(28)」ような地位にあるイギリスによって、その最も進んだ社会変革によって主導されると考えた。とは言え既にこの時期のイギリスは、自国の秩序を守るために、むしろロシアをはじめとする東ヨーロッパの反動勢力と結びついていた。すなわち西と東の反動、即ちブルジョア的反革命と封建的反動が織りなす「ヨーロッパの均衡」が、弱小民族、被従属国における革命的諸運動の桎梏となっていたのである。こうした中にあっては、東ヨーロッパの国家体系そのものの破滅は、必ずしも単に、西ヨーロッパに対する受動的役割を果すに止まらない。それは、西ヨーロッパのブルジョア的反革命派に打撃を与え、必ずそこでの紛糾を喚起する。

このような認識の上に立ってマルクスとエンゲルスは、ドイツ、ポーランド、ハンガリアにおける社会変革とその民族独立闘争が、ヨーロッパ民主主義運動の一翼を担うことを期待したのである。

『民族自決権について』の中でレーニンは、一八五〇年代までのマルクスの思想の中では、民族問題はまだ十分基礎づけられていないと指摘した。確かにマルクスとエンゲルスは、あらゆる民族の完全な解放は、結局のところプロレタリアートの運動によってもたらされるとし、従って民族の問題に、何らの絶対的意味づけを与えなかった。しかしこのことは、思想形成の初期段階にあって、彼等が民族の問題に対して無関心であったことを示すものでは決してない。それどころか我々は、プロレタリアートの世界的解放を定義づけたこの段階にあって既に、彼等が、階級の解放と民族の解放の関わり合いに対する最も基本的な認識を持っていたということを、識るのである。

(1) エンゲルス、『マルクスと〃新ライン新聞〃』『マルクス＝エンゲルス選集』大月書店、第三巻、一〇ページ。
(2) エンゲルス、「民主的汎スラヴ主義」、『マルクス＝エンゲルス全集』大月書店、六巻、以下全・VI・二七七ページ。と略す。なお筆者がどちらか不明の場合は無記。
(3) エンゲルス、「ハンガリー」、全・VI・五〇三ページ。
(4) エンゲルス、「ポーゼン」、全・VI・四四七ページ。
(5) 同右、四四五ページ。
(6) このような規定の歴史的評価については、然るべき専門的研究に負わねばならない。
(7) エンゲルス、「フランクフルトにおけるポーランド討論」、全・V・三三三ページ。
(8) 同右、三三二ページ。
(9) (7)に同じ。
(10) エンゲルス、「フランクフルトにおけるポーランド討論」、全・V・三二九ページ。
(11) エンゲルス、「銷却についてのパトウの覚え書」、全・V・一〇二〜一〇三ページ。
(12) 「ドイツの対外政策とプラハにおける最近の事件」、全・V・二八〇ページ。
(13) 同右、一九八ページ。
(14) 同右。
(15) エンゲルス、「民主的汎スラヴ主義」、全・VI・二七〇ページ。
(16) 同右、二七一ページ。
(17) エンゲルス、「マジャール人の闘争」、全・VI・一六八ページ。
(18) エンゲルスのこのような評価は、その後多くの論議を呼ぶこととなった。
(19) エンゲルス、「民主的派スラヴ主義」、全・VI・二八三ページ。
(20) 同右、二六八ページ。
(21) エンゲルス、「フランクフルトにおけるポーランド討

論」、全・V・三三三ページ。

(22)「ゲルヴィヌス新聞の脅迫」、全・V・一〇一ページ。

(23) マルクス、「ブルジョアの公文書」、全・VI・一四七ページ。

(24) 註(1)に同じ、六ページ。

(25) エンゲルス、「民主的汎スラヴ主義」、全・VI・二七〇ページ。

(26) 同右、二六六ページ。

(27) マルクス、「ポーランドについての演説」、全・IV・四二九～四三〇ページ。

(28) マルクス、「イタリアの革命運動」、全・VI・七三ページ。

(一橋大学助手)